

高向遺跡発掘調査概要Ⅱ

—溜池等改修事業丹保池改修工事に伴う埋蔵文化財調査—

2001年3月

大阪府教育委員会

はしがき

河内長野市は、広大な市域を擁し、多數の国宝、重要文化財を所蔵する金剛寺や觀心寺をはじめ、旧石器時代から近世に至る数多くの遺跡が存在する南河内有数の歴史的、文化的遺産に恵まれた地域であります。

特に、石川西岸に開けた平地には帯状に遺跡が集中しており、中でも高向遺跡は大規模な遺跡の一つとして知られています。

このたび、丹保池改修工事に先立つ発掘調査を実施しましたところ、古墳時代から中世に至る建物跡や遺物が出土しました。

これらの成果は、周辺の開発や条例の施行など歴史を解明していく上で貴重な資料となるものであります。

発掘調査の実施にあたって格別のご協力を賜った河内長野市教育委員会と地元の皆様に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも文化財の保護にご理解とご協力をお願いいたします。

平成13年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 小林 栄

例　　言

1. 本書は平成12年度に実施した、溜池等改修事業丹保池改修工事に先立つ高向遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は、大阪府環境農林水産部から依頼を受けた大阪府教育委員会文化財保護課が、平成12年12月8日から平成13年3月23日まで、調査第2グループ主査佐久間貴士を担当者として実施し、現地調査については河内長野市教育委員会社会教育課主幹兼文化財保護係長尾谷雅彦氏及び市立ふれあい考古館員藤田徹也氏の全面的な協力を得た。
遺物整理は発掘調査と並行して市立ふれあい考古館において実施し、平成13年3月30日に完了した。
3. 本書の執筆、編集は一部尾谷氏が執筆した部分を除いて藤田氏が行った。
4. 航空写真測量は株式会社アスコに委託して実施した。撮影フィルムは同社において保管している。
5. 本調査に要した費用は農林水産省及び文部科学省の国庫補助を得て、大阪府環境農林水産部と大阪府教育委員会が負担した。

目 次

はしがき

例言

本文目次

挿図目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 調査の方法	1
第3章 位置と環境	1
第4章 調査の結果	
1. 基本層序	7
2. 遺構と遺物	
(1) 遺構と出土遺物	7
(2) 表採・包含層・築堤盛土遺物	17
第5章 まとめ	17

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図と既往の調査区	第16図 表採・包含層・築堤盛土遺物
第2図 調査地周辺の地形	第17図 杭列平面・立面図
第3図 遺構平面・断面図	第18図 土坑断面図
第4図 S P 6 出土遺物実測図	第19図 高向周辺の条里プラン
第5図 S P 9 出土遺物実測図	第20図 既往調査で検出された建物軸
第6図 S P 14 出土遺物実測図	第21図 既往調査で検出された建物跡
第7図 S P 27 出土遺物実測図	
第8図 S P 39 出土遺物実測図	
第9図 S P 40 出土遺物実測図	
第10図 S P 41 出土遺物実測図	
第11図 S K 1・S K 2 出土遺物実測図	
第12図 S K 3 出土遺物実測図	
第13図 S K 4 出土遺物	
第14図 S K 6 出土遺物	
第15図 S P 遺構断面図	

第1章 調査に至る経過

大阪府における農業基盤整備の一環として、老朽化した溜池の改修事業が進められている。高向遺跡の範囲に含まれる丹保池も堤体の浸食が進み、防災機能の改善が必要となったため、文化財保護課では環境農林水産部農の振興整備室と協議を重ねた結果、平成10年度に池内の確認調査を実施した。確認調査の結果、池の中央に近い部分は池築造時に造構面以下まで大きく掘り下げられていたものの、北と東の堤体に近い部分では造構面と遺物包含層が良好に遺存していることが判明したため、堤体改修で毀損される部分について平成11年度から2年に分けて本発掘調査を実施することとした。本書に収録したのはその2年度目、252m²分の調査結果である。

第2章 調査の方法

当調査区はL字形である。調査の対象となる丹保池の堤体に沿って調査区を設定したため、その形は厳密に90度で折り曲がっているのではなく、やや歪な形状である。

調査は、堤体の斜面に沿って表土を機械で掘削した後、表土以下の堤体の築堤による盛土・包含層を遺物・造構に注意を払いながら人力で掘り下げた。

昨年度の調査において築堤盛土によって部分的に包含層が削平をされていることが確認されており、調査区全体の層位が確認できるまで、調査区内に5箇所にセクションを設けた。なお、調査時に雨が多く堤盛土が崩れる可能性があったため、一部のセクションは残したまま調査を進行し、造構の検出に努めた。

第3章 位置と環境

調査区は、和泉葛城山系を水源とする石川左岸の中位段丘上、標高150mに造られた丹保池に隣接する。調査区周辺は高向遺跡として発掘調査が行われ旧石器時代から中世に至る複合遺跡であることが知られ、当調査区も既往の調査内容に関連するものと考えられる。

高向遺跡の範囲は東西約0.5km、南北約1.1kmに広がり、行政区画では河内長野市高向及び上原町に位置している。

周辺の歴史的環境としては、石川本流から天見川沿いにかけて北から向野遺跡・喜多町遺跡・三日市遺跡・小塙遺跡の4遺跡が確認されている。これらの各遺跡からは縄文時代後期の土器が出土しており、また三日市・小塙遺跡からは早期の押型文土器も出土している。石川本流では、当遺跡の他に当遺跡の対岸に位置する宮山遺跡があり、中期後半の土器とともに竪穴住居が検出されている。他に、高木遺跡・寺ヶ池遺跡・菱子尻遺跡からはサヌカイト片や石器が確認されている。

弥生時代になると石川左岸の塩谷遺跡・天見川右岸の三日市遺跡・三日市北遺跡・大師山遺跡などがある。塩谷・三日市遺跡からは中期の遺物が出土し大師山遺跡からは後期の遺物が出土している。

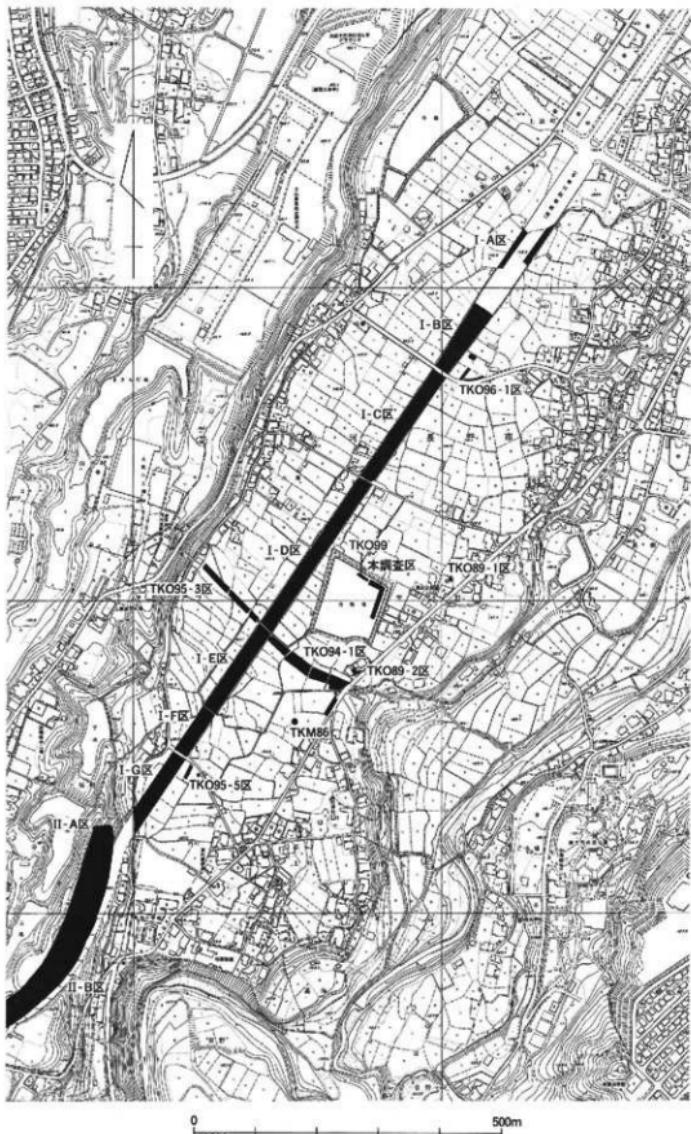
古墳時代では、前期の前方後円墳として大師山古墳が天見川右岸に位置している。中期の古墳群としては三日市遺跡古墳群、後期の鳥帽子形古墳が分布している。また石川本流沿いには、五ノ木古墳、法師塚古墳、双子塚古墳が分布したと伝えられているが、現存はしていない。また、高向遺跡付近の上原町には後期の塚穴古墳が現存している。集落遺跡としては、前期から中期にかけての三日市遺跡、後期後半では喜多町遺跡などがある。

奈良時代では、高向遺跡・喜多町遺跡・小塙遺跡からは掘建柱建物や土坑が検出されているが、河内長野市域の遺跡において奈良時代のものは全体的に少ない。

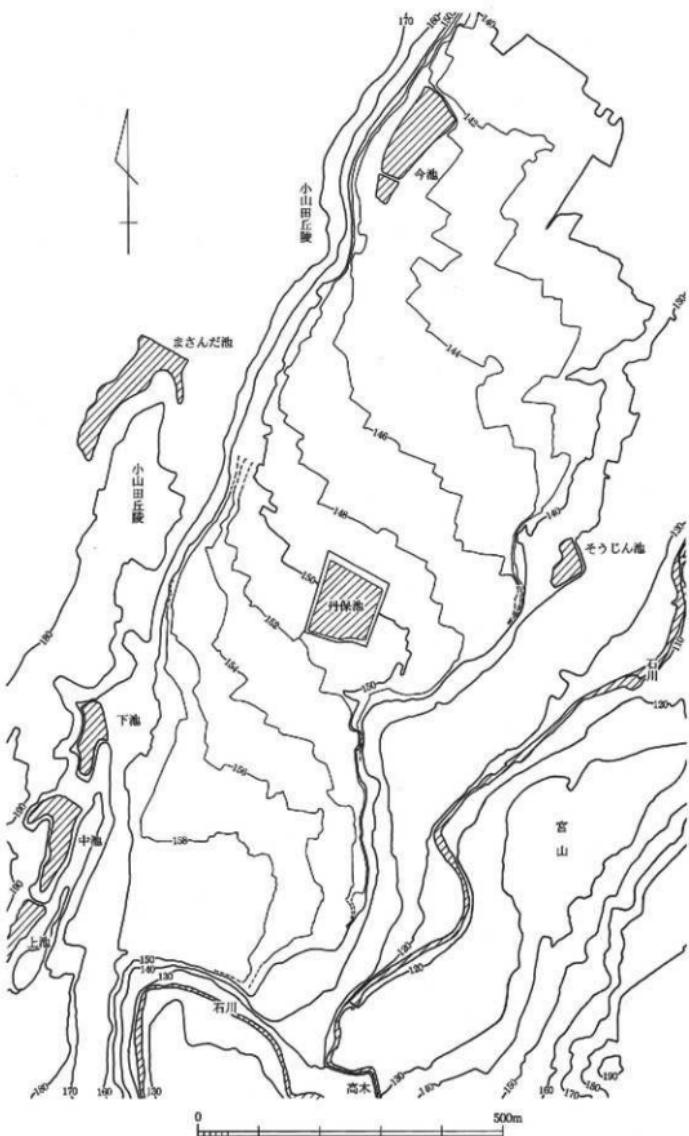
平安時代の遺跡も奈良時代と同様全体的には少ないが、10世紀代の掘建柱建物が検出された天見川流域の尾崎遺跡・11～12世紀代の掘建柱建物が検出された三日市遺跡や石川流域の大日寺遺跡・野間里遺跡が確認されている。

中世になると河内長野市域の遺跡は激増する。この要因としては、農地開発の成功と東西高野街道の整備との関連が想定される。まず、東高野街道では市町西・市町東遺跡・向野遺跡があり、西高野街道では菱子尻遺跡・古野町遺跡が挙げられる。東西の高野街道が合流して天見川沿いに南に伸びる高野街道では、合流付近の長野神社遺跡・喜多町遺跡・大日寺遺跡、更に南の三日市遺跡・尾崎遺跡・ジョウノマエ遺跡・清水遺跡・千早口駅南遺跡・天見駅北方遺跡と街道沿いに遺跡が続く。また、平安時代末期の開基とされる天野山金剛寺・観心寺遺跡もある。

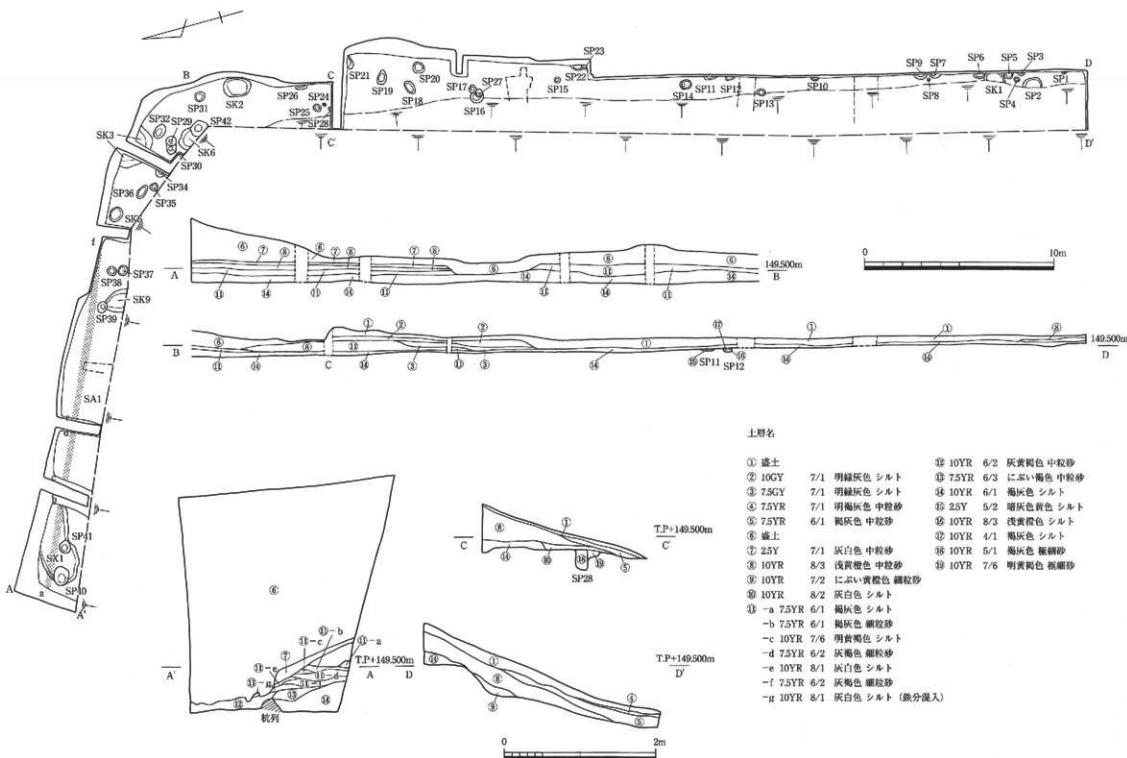
その他に、中世の城館跡が河内長野市内に数十ヶ所分布し、生産遺跡として平安時代から中世にかけての炭焼窯と考えられる窯跡が山間部に分布している。



第1図 調査区位置図と既往の調査区



第2図 調査地周辺の地形



第3図 遺構平面・断面図

第4章 調査の成果

1. 基本層序（第3図）

本年度の調査区は、昨年度調査区の延長である丹保池北側堤部から東側堤部にかけての252m²である。調査区全域にわたって丹保池築堤による盛土が確認されている。

調査区西壁の断面では、盛土の複数回にわたる改修が確認できた。これらの層には、包含層や地山の土がブロック状で混入し、包含層を断ち切って堆積している。また、包含層が切れた箇所と杭列がほぼ一致している。

調査区南壁の断面では、何層にも重なって堆積している西壁とは様相が異なり、3つの層が緩やかに堆積している。⑥層は包含層を切って池側に向かって落ち込んでいる。

以上のように、築堤のための盛土により包含層が削られていること、盛土に地山の土がブロック状に混入していることなどから、調査区池側の約半分は、築堤により削平されていることが確認できる。

地山は灰白色のシルトおよびグライ化した層であり、遺構はこの面から検出されている。

2. 遺構と遺物

(1) 遺構と出土遺物

(S P 1)

遺構は、調査区東側壁際から検出し、遺構の平面形は不明である。南北直径21.5cm・深さ2.5cmであった。埋土は、7.5Y R 6／1褐色（シルト）と5Y 8／1灰白色（シルト）が混在している。

(S P 2)

遺構は、丹保池側に落ち込む擾乱により一部破壊を受けている。検出した状況は直径約70cm、深さ約15cmであった。埋土は10Y R 6／1褐色（シルト）とN 6／灰色（極細砂混じりのシルト）の混合土であった。

(S P 3)

調査区東側壁際から検出し、遺構の平面形は不明である。直径37.5cm・深さ3cmであった。埋土は5Y 5／1灰色（シルト）であり、炭化物が少量含まれている。

(S P 4)

直径27cm、深さ14cmで、遺構の平面形は円形状である。①層は2.5Y 5／1黄灰色（粘質土）に地山ブロックが少量混入している。②層は2.5Y 7／2灰黄色の地山の土よりやや汚れている観がある上である。

(S P 5)

直径40cm、深さ15cmで、遺構の平面形は円形状である。遺構の一部が、調査区東側壁にかかっ

ている。①層は5Y 6／1灰色（シルト）、②層は2.5G Y暗オリーブ灰色（シルト）と7.5G Y 7／1明緑灰色（シルト）が混在している。

（S P 6）

調査区壁面側から検出した。①層は7.5Y R 6／1褐灰色（極細砂混じりのシルト）で、炭化物が若干混入していた。

出土遺物として体部最大径8.9cmを測る須恵器の小型壺が出土している。

（S P 7）

調査区東側壁際で検出され、平面形は不明である。①層は5Y 5／2灰オリーブ色（極細砂混じりのシルト）と10Y 7／2灰白色（シルト）の混合土、②層は10Y 6／2オリーブ灰色（シルト）と5Y 4／2灰オリーブ色（シルト）の混合土、③層は2.5Y 7／2（シルト）であった。

（S P 8）

直径約25cm、深さ約4cmで平面形は不明である。埋土は5Y 4／2灰オリーブ色（極細砂混じりのシルト）であった。

（S P 9）

調査区の東側壁際で検出された。検出状況から遺構の大半が調査区を越えた東側にのびると考えられ、遺構断面図は中心をやや外れた箇所の状況を表している。

①層は10Y R 4／1褐灰色（極細砂混じりのシルト）、②層は5Y 5／2灰オリーブ色（極細砂混じりのシルト）、③層は7.5Y 5／1灰色（粘土混じりのシルト）と2.5G Y 6／1オリーブ灰色（極細砂）の混合土、④層は、7.5Y 6／3オリーブ黄色（極細砂混じりのシルト）と5Y 5／1灰色（粘土混じりのシルト）の混合土、⑤層は2.5Y 4／1

黄灰色（粘土混じりのシルト）と10Y 7／2灰白色（極細砂混じりのシルト）の混合土である。

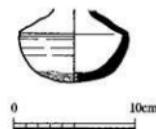
出土遺物としては、土師器の壺（1）と須恵器の壺蓋（2）が挙げられる。土師器の壺は、口径12cmを測る。内面はヘラミガキが施され、口縁部外面は横ナデが施されている。須恵器の壺蓋は、かえり部の径10.1cmを測り、天井部には自然釉が付着している。

（S P 10）

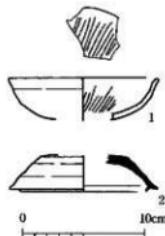
直径約30cm、深さ約5cmで、遺構はほぼ円形状である。埋土は、5Y 5／1灰色（シルト）であった。

（S P 11）

直径約62cm、深さ約5cmである。調査区東側壁に接し、遺構の平面形は不明である。埋土は2.5Y 5／2暗灰黄色（シルト）と7.5Y 6／2灰オリーブ色（シルト）の混合土であった。



第4図 S P 6 出土遺物実測図



第5図 S P 9 出土遺物実測図

(S P 12)

直径約34cm、深さ約12cmである。調査区東側壁面に接し、遺構の平面形は不明である。①層は10YR 8/3浅黄橙色（シルト）と10YR 7/1灰白色（シルト）の混合土、②層は10YR 4/1褐灰色（シルト）であった。

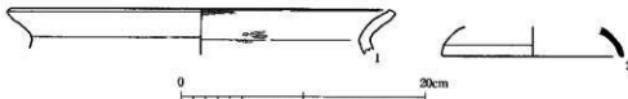
(S P 13)

直径約36cm、深さ約6cmで遺構の平面形は円形状である。埋土は、7.5YR 6/1褐灰色（シルト）であった。

(S P 14)

直径約55cm、深さ約20cmで平面形はほぼ円形状である。①層は、2.5GY 6/1オリーブ灰色（シルト）でわずかに鉄分の沈着がみられる。②層は、5GY 5/1オリーブ灰色（シルト）で①層よりも粘性が強くしまっている。また、炭化物もみられる。③層は、5YR 6/4オリーブ黄色（シルト）と5Y 5/1灰色（シルト）の混合土、④層は、ほとんど③層と変わりはないが、粘性が強くしまっている。①・②層は柱痕と考えられ、③・④層は地山を埋め戻した土と考えられる。

出土遺物として、土師器の壺の口縁部（1）と須恵器の坏蓋が（2）が出土している。土師器の壺の口径は30.6cmを測り、内面は摩滅しているが、わずかにハケメの痕跡が残る。



第6図 S P 14出土遺物実測図

(S P 15)

直径約35cm、深さ約5cmである。調査区東側壁際に一部かかっており、遺構の平面形は不明である。埋土は、2.5GY 5/1オリーブ灰色（シルト）で、鉄分の沈着がみられた。

(S P 16)

直径約70cm、深さ約25cmで遺構の平面形は円形状である。①層は10YR 2/2黒褐色（極細砂混じりのシルト）と10YR 6/6明黄褐色（極細砂混じりのシルト）の混合土、②層は①層とほぼ同色の埋土が混入しているが、やや黄色系が強かった。③層は2.5Y 4/2暗灰黄色（極細砂）と10YR 6/6明黄褐色（極細砂混じりのシルト）の混合土、④層は5Y 3/1オリーブ黒色（シルト）と10YR 6/6明黄褐色（極細砂混じりのシルト）の混合土であった。

いずれの層も、付近の地山と同系色である10YR 6/6明黄褐色が混入しており、人為的な埋め戻しが想定される。

(S P 17)

表面精査の時から柱痕部分が確認できた遺構であり、直径約38cm、深さ約22cmで遺構の平面

形は円形状である。

①層は5 Y 4 / 3暗オリーブ色（極細砂）と7.5 Y 4 / 2灰オリーブ色（シルト）の混合土、
②層は5 Y 3 / 1オリーブ黒色（シルト）、③層は5 Y 4 / 4暗オリーブ色、④層は5 Y 5 / 4
オリーブ色（極細砂混じるシルト）であり、⑤層は5 Y 5 / 2灰オリーブ色（シルト）である。

（S P 18）

直径約30cm、深さ約10cmで遺構の平面形は円形状である。①層は7.5 Y 3 / 2オリーブ黒色
(シルト)、②層は7.5 Y 4 / 3暗オリーブ色（シルト）と5 Y 4 / 2灰オリーブ色（シルト）の
混合土であった。

（S P 19）

直径約48cm、深さ約18cmで遺構の平面形は円形状である。①層は7.5 Y 5 / 1灰色（シルト）
と10 Y 7 / 2灰白色（極細砂）の混合土、②層は7.5 Y 4 / 1灰色（極細砂混じりのシルト）と
10 Y 7 / 2灰白色（極細砂）の混合土、③層は10 Y 6 / 1灰白色（シルト）と10 Y 6 / 2オリーブ
色（シルト）の混合土であった。④層は付近の地山土と同系色で、人為的な埋め戻しが想定
される。

（S P 20）

直径約62cm、深さ約13cmで遺構の平面形は円形状である。①層は2.5 Y 4 / 6オリーブ褐色
(シルト)と7.5 Y 4 / 1灰色（極細砂混じりのシルト）であり、これは付近の地山の土と同系
色でやや黒みをおびており人為的に埋め戻された土と考えられる。②層はN 4 / 灰色（シルト）
であり、少量の炭化物が含まれていた。

（S P 21）

調査区東側に拡張した部分から検出した。直径約40cm、深さ約7cmである。拡張区の壁面に
接しているため遺構の平面形は不明である。埋土は5 Y 5 / 1灰色（シルト）であった。

（S P 22）

遺構は調査区東側に拡張した部分から検出した。直径約75cm、深さ約22cmである。拡張区の
壁面に接しているため遺構の平面形は不明である。①層は5 Y 5 / 2灰オリーブ色（シルト）、②
層は5 Y 4 / 1灰色（極細砂混じりのシルト）で少量の炭化物を含んでいた。③層は2.5 Y 6 / 1
黄灰色（極細砂混じりのシルト）、④層は7.5 Y 4 / 1灰色（極細砂混じりのシルト）であった。

（S P 23）

遺構は調査区東側に拡張した部分から検出した。S P 22の南側に位置し、S P 22に一部切られ、
また調査区壁面に接しているため遺構の平面形は不明である。埋土は7.5 Y 4 / 1灰色（シルト）
であった。

（S P 24）

直径約15cm、深さ約5cmの円形を呈す。埋土は5 Y 5 / 1灰色（極細砂混じりのシルト）で
あり、炭化物がみられた。

(S P 25)

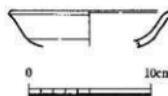
直径約38cm、深さ24cmの円形を呈す。①層は2.5Y 4／1 黄灰色（極細砂混じりのシルト）と2.5Y 5／3 黄褐色（極細砂混じりのシルト）の混合土、②層は7.5Y 5／1 灰色（シルト）、③層は2.5Y 4／2 暗灰黄色（シルト）と10Y R 3／4 暗褐色（極細砂）の混合土、④層は2.5Y 4／2 暗灰黄色（シルト）と10Y R 3／4 暗褐色（極細砂）の混合土であった。

(S P 26)

直径約54cm、深さ約21cmである。調査区東側壁に接し、遺構の平面形は不明である。①層は5Y 6／6 オリーブ色（シルト）と2.5Y 4／2 暗灰黄色（シルト）の混合土、②層は7.5Y 5／2 灰オリーブ色（シルト）と10Y 5／1 灰色（シルト）の混合土であった。

(S P 27)

S P 16をほぼ完掘後、検出した。①層は、10Y R 5／1 褐灰色（シルト）と10Y R 4／6 褐色（極細砂混じりのシルト）の混合土、②層は2.5Y 4／1 黄灰色（シルト）に地山（灰白色）ブロックが混入している。出土遺物としては、土師器の坏が挙げられる。この土師器の口径は12.7cmを測る。



(S P 28)

直径約30cm、深さ約30cmで遺構の平面形は円形状である。
⑦層は10Y R 5／1 褐灰色（極細砂）に10Y R 7／6 明黄褐 第7図 S P 27出土遺物実測図色（シルト）の地山土が混入している。⑧層は10Y R 4／1 褐灰色（極細砂）に10Y R 7／6 明黄褐色（シルト）の地山土が混入している。

(S P 29)

直径約43cm、深さ約22cmで遺構の平面形は円形状である。
①層は2.5Y 4／1 黄灰色（シルト）と10G Y 7／1 明緑灰色（シルト）の混合土、②層は5Y 4／1 灰色（極細砂混じりのシルト）であった。

(S P 30)

直径約45cm、深さ約30cmの円形を呈し、一部S P 36に切られており遺構の平面形は不明である。
①層は5Y 5／1 灰色（シルト）、②層は5Y 5／1 灰色（シルト）に10G Y 7／1 明緑灰色（シルト）がブロック状に混入する。③層は5G 6／1 緑灰色（シルト）と7.5Y 5／1 灰色（極細砂混じりシルト）の混合土、④層は5G 5／1 緑灰色（シルト）であった。

(S P 31)

直径約60cm、深さ約20cmで遺構の平面形は梢円形状である。①層は2.5Y 4／2 暗灰黄色（シルト）、②層は5Y 4／1 灰色（極細砂混じりのシルト）であった。

(S P 32)

直径約75cm、深さ約35cmで遺構の平面形は梢円形状である。

①層は7.5Y 4／1灰色（シルト）、②層は7.5Y 5／2灰オリーブ色（シルト）と5Y 4／1灰色（極細砂混じりのシルト）の混合土、③層は5Y 3／1オリーブ黒色（シルト）、④層は5Y 4／1灰色（極細砂混じりのシルト）と7.5Y 3／1オリーブ黒色（シルト）の混合土で炭化物が多量に含まれていた。

（S P 33）

S K 3に一部切られており、深さは約10cmを測り遺構の平面形は不明である。①層は10Y 6／1灰色（シルト）、②層はN 6／灰色（極細砂混じりのシルト）③層は5Y 4／1灰色（極細砂混じりのシルト）と10Y 6／1灰色（シルト）の混合土であり、少量の炭化物が含まれていた。

（S P 34）

直径約50cm、深さ約30cmで、遺構の平面形は円形状である。①層は4／1灰色（極細砂混じりシルト）と7.5Y 3／1オリーブ黒色（シルト）の混合土、②層は5Y 4／1灰色（シルト）と10Y R 6／1褐色（極細砂混じりのシルト）であり、少量の炭化物が含まれていた。

（S P 35）

直径約40cm、深さ約3cmで遺構の平面形は円形状である。埋土は7.5Y 4／1灰色（極細砂混じりのシルト）に2.5Y 4／6オリーブ褐色（シルト）の地山土が混入している。

（S P 36）

直径約75cm、深さ約5cmで遺構の平面形は梢円形状である。埋土は10Y R 6／1褐色（極細砂混じりのシルト）であった。

（S P 37）

直径約50cm、深さ約5cmで遺構の平面形は円形状である。埋土は10Y R 5／3にぶい黄褐色（極細砂混じりのシルト）と10Y R 6／2灰黄褐色（極細砂混じりのシルト）の混合土であった。

（S P 38）

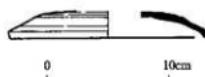
S P 37の東側で検出した。直径約45cm、深さ約5cmで遺構の平面形は円形状である。埋土は10Y R 6／2灰黄褐色（極細砂混じりのシルト）であった。

（S P 39）

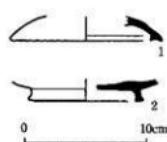
直径約50cm、深さ約2cmで遺構の平面形は円形状である。埋土は2.5Y 5／2暗灰黄色（シルト）と10Y 6／2オリーブ灰色（中粒砂混じりの極細砂）であった。出土遺物としては須恵器の坏蓋が挙げられる。

（S P 40）

直径約75cm、深さ約15cmで遺構の平面形は円形状である。①層は2.5Y 5／1黄灰色（シルト）と5Y 5／2灰オリーブ色（シルト）の混合土、②層は5Y 4／1灰色（シルト）であった。出土遺物としては須恵器の坏蓋（1）と



第8図 S P 39出土遺物実測図



第9図 S P 40出土遺物実測図

壺の底部（2）が挙げられる。

(S P 41)

直径約70cm、深さ約15cmで遺構の平面形は円形状である。埋土は10YR 6／1褐灰色（極細砂）と7.5Y 4／1灰色（シルト）であった。出土遺物としては、口径17cmを測る須恵器の皿が挙げられる。

(S P 42)

直径約70cm、深さ約40cmで遺構の平面形は円形状である。①層は7.5Y 4／2灰オリーブ色（シルト）、②層は5Y 4／1灰色（シルト）で少量の炭化物が含まれている。③層は5Y 4／1灰色（極細砂混じりのシルト）、④層は5Y 5／1灰色（シルト）で、他の層よりもしまりが悪く水分を多く含んでいる。⑤層は2.5Y 4／2暗灰黄色（シルト）であった。

(S K 1)

調査区南側で検出された。当調査区で検出された遺構埋土から直径20cmをこえる石が検出されたのは、この遺構のみで、やや他の遺構とは様相が異なる。土壤幕の可能性もある。埋土は3層に分けられる。①層は、10YR 6／1褐灰色（粘土混じりのシルト）である。また、少量の炭化物も含んでいる。②層は、10YR 7／4にぶい黄褐色（粘土混じりのシルト）である。③層は、7.5YR 6／1灰色（粘土混じりのシルト）である。

遺物は、掘形に付着する状態で⑤層から土師器の皿が出されている。この土師器の皿は口径14.2cm、推定高3.5cmを測り、外側にはヘラミガキが施されている。外側部はやや丸みを帯びて口縁へと立ち上がる。

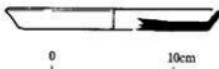
(S K 2)

直径約65cm、深さ約25cmの格円形状である。①層は5Y 6／6オリーブ色（シルト）と2.5Y 4／2暗灰黄色（シルト）の混合土、②層は7.5Y 5／2灰オリーブ色（シルト）と10Y 5／1灰色（シルト）の混合土であり、直径10cm台の礫が少量混入していた。

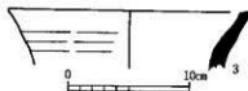
出土遺物としては、須恵器の壺蓋（1）と須恵器の壺（2）が挙げられる。壺蓋は、宝珠のつまみをもつ。壺は口径10cmである。

(S K 3)

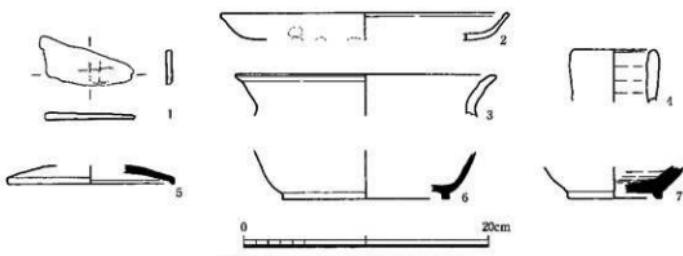
調査区北側壁に接しているために全形は不明である。深さは約15cmを計る。①層は10Y 6／1灰色（シルト）と7.5Y 6／2灰オリーブ色（シルト）の混合土、②層はN 6／灰（極細砂混じりシルト）と10Y 6／2オリーブ灰色（シルト）の混合土、③層は5Y 4／1灰色（極細砂混じりのシルト）であった。出土遺物としては、墨書き器（1）・土師器の皿（2）・土師器の壺（3）・製塙土器（4）・須恵器の壺蓋（5）・須恵器の壺（6）・須恵器の壺の底部（7）が挙げられる。



第10図 S P 41出土遺物実測図



墨書き器に記されている文字は細片であるため全容はつかめないが、井戸の「井」もしくは「イゲタ」であると考えられる。



第12図 SK 3出土遺物実測図

(SK 4)

一部SP39に切られている。①層は7.5Y 4/2灰オリーブ色（シルト）と2.5Y 4/3オリーブ褐色（シルト）の混合土である。若干、鉄分の沈着がみられた。出土遺物としては須恵器の壺が挙げられる。



第13図 SK 4出土遺物実測図

(SK 5)

直径約60cm、深さ約10cmを測る。形は橢円形状である。埋土は、5Y 5/2灰オリーブ色（シルト）であった。

(SK 6)

SP42に切られており全形は不明である。深さは約15cmを測る。埋土は2.5Y 4/2暗灰黄色（シルト）であった。出土遺物としては、土師器の甕が挙げられる。

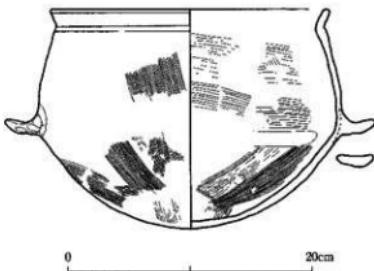
(SX 1)

調査区南側から調査区北側壁面にかけての落ち込みで全形は不明である。この落ち込みを掘削した後、SP40・41を検出した。埋土は、2.5Y 4/2暗灰黄色（シルト）であった。遺構の性格は不明であるが、旧地形を反映している可能性が高い。

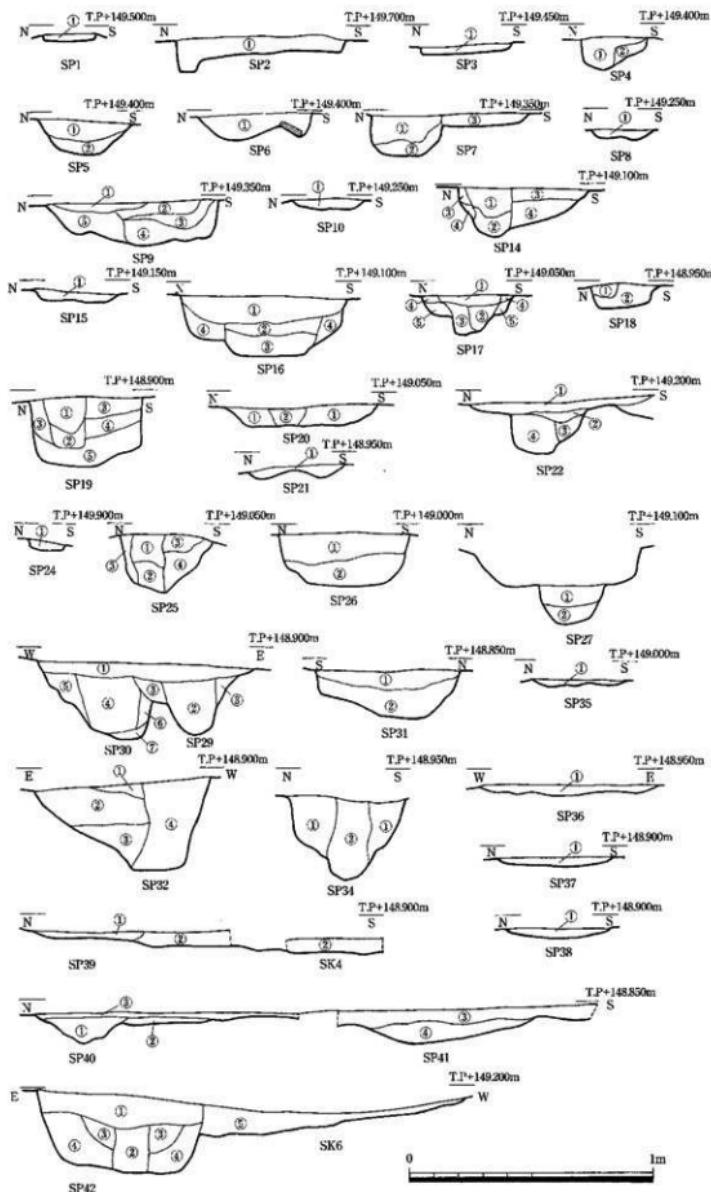
(SA 1)

調査区の北側で東西に並ぶ杭列を検出した。この杭列の機能としては、丹保池北側堤の土留め的な役割を担っていたと考えられる。

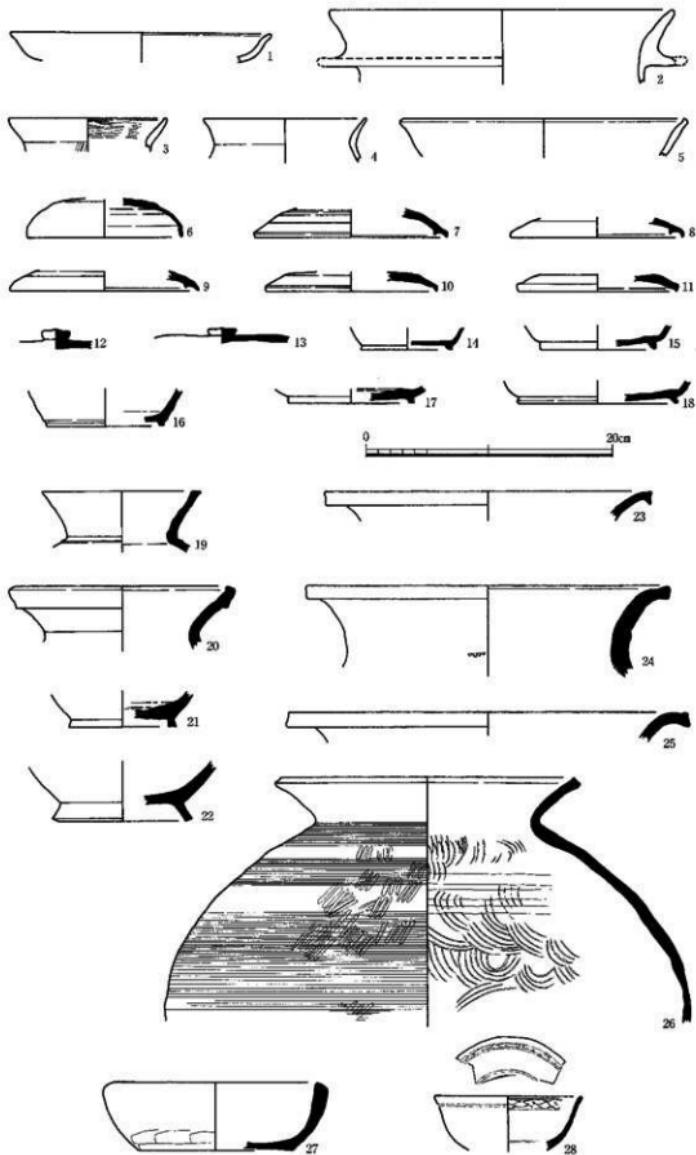
検出した杭には縦杭と横杭の2種類があり、縦杭・横杭ともに規則性は認められないが、縦杭



第14図 SK 6出土遺物実測図

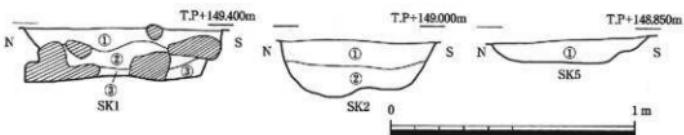


第15図 遺構断面図



第16図 表採・包含層・築堤盛土遺物

は約40cm間隔で打ち込まれている。横杭は、土圧で折れているもの、曲がっているものが多いが、良好な状態で検出した。



第17図 遺構断面図

(2) 表採・包含層・堤盛土出土遺物（第16図）

土師器は皿（1）、壺（2～5）が出土している。（3）は、口縁部内面にハケメが施されており、他のものよりもやや古い様相ではあるが詳細は不明である。

須恵器は壺蓋（6～13）、壺身（14～18）、壺（19～22）、壺（23～26）が出土している。いずれも7世紀から8世紀にかけての所産であると考えられる。この他に、瓦質の火鉢（27）、伊万里焼の碗（28）が出土している。

第5章 まとめ（第19～21図）

調査の結果、調査区池側は池を築造する際に大きく掘り下げられていたが、主に調査区堤体側から杭列（S A 1）・土坑・ピット等の遺構、それに伴う遺物が検出された。出土遺物は細片が多く、実測可能なものは少なかったが、この集落跡が7世紀から8世紀代である見解が得られた。

昨年度の調査において、堤体の土留めとしての機能を果たすと考えられる杭列が検出されている。この杭列の軸はN-59°-WのものとN-55°-Wの2種類あり、今次調査において、昨年度調査区の東側部分で検出されたN-55°-Wの杭列とはほぼ同軸の杭列を検出した。この杭列の軸が高向地区内で見られる方格地割（条里プラン）と一致することは昨年度の報告書で明らかにされている。

昨年度の検討では、現在の堤軸に近いN-59°-Wを示す杭列の時期を中世の中後半期としており、N-55°-Wを示す杭列を条理との関係から「古丹保池」の存在を指摘している。昨年度の検討を積極的に評価すれば、今次の調査で検出されたN-55°-Wとほぼ近似値を示す杭列は、この「古丹保池」に伴うものと考えられ、今次調査の杭列は、包含層が築堤盛土によって削平されている箇所とほぼ一致し、「古丹保池」築堤の際に構築された杭列である可能性が高い。

築堤盛土から出土した遺物の中には、遺構面や包含層とほぼ同時期のものが含まれており、また築堤盛土層に包含層や地山の遺構面の土がブロックで混入している。また、杭列の検出した丹保池北側の地山レベルが、丹保池東側の調査区より約40cm低く、遺構も浅い。これらの事から、「古丹保池」築堤の際、地山の遺構面や包含層を削りとて構築したと考えられる。

既往の調査では、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物の他に中世の掘立柱建物が検出されている。しかし、今次調査の遺構からは中世遺物の出土していない。また、築堤盛土・包含層からの出土も極めて少なかった。従って、「古丹保池」構築の時期は8世紀以後、中世以前であると考えられ、既往の調査によって明らかにされている高向地区条里プランが成立した11世紀前後である可能性が考えられる。

さて、既往の調査で奈良時代の遺構・遺物を検出・出土したのは、高向遺跡I～F区・TKO89-1・TKO89-2・TKO94-1の各調査区である。そこで、主に丹保池付近に位置するTKO89-1・TKO89-2・TKO94-1について触れてまとめにかえたい。

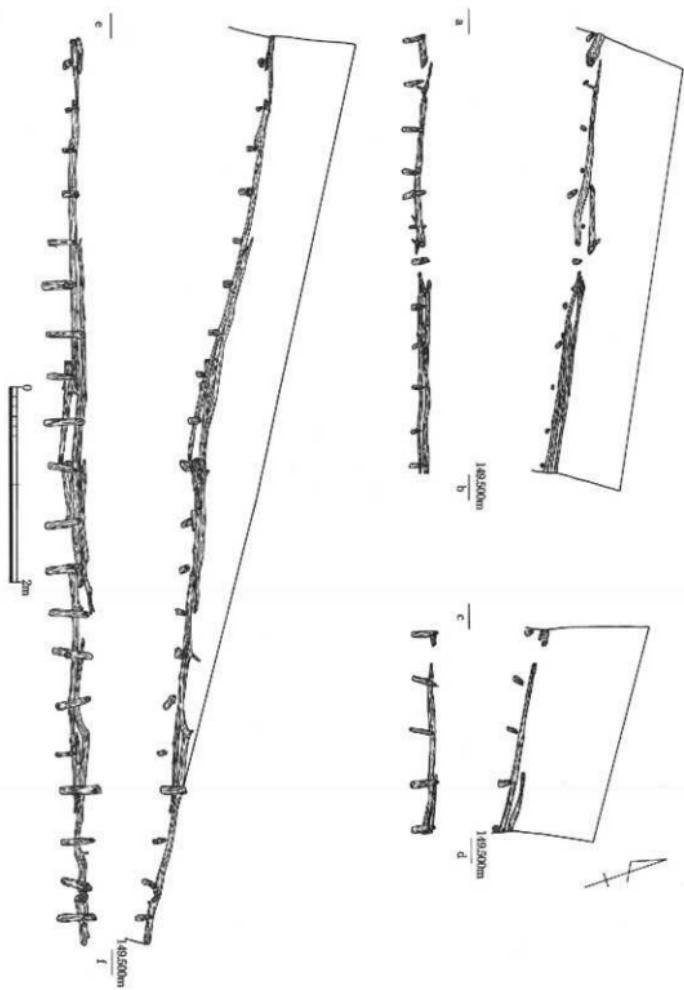
TKO89-1は、今次調査区の北東方角にあたる。ここからは、8世紀代の掘立柱建物1棟が検出されている。この掘立柱建物は、調査区の関係から全容は明らかではないが、柱間2.1mを測り、方円形の掘形をもつ大型の建物と推定されている。

丹保池北西側にあたるTKO89-2からもTKO89-1同様、8世紀代の掘立柱建物が2棟検出されている。これらの建物は、いずれも柱間1m強であり、TKO89-1の掘立柱建物と比較するとやや小さい。

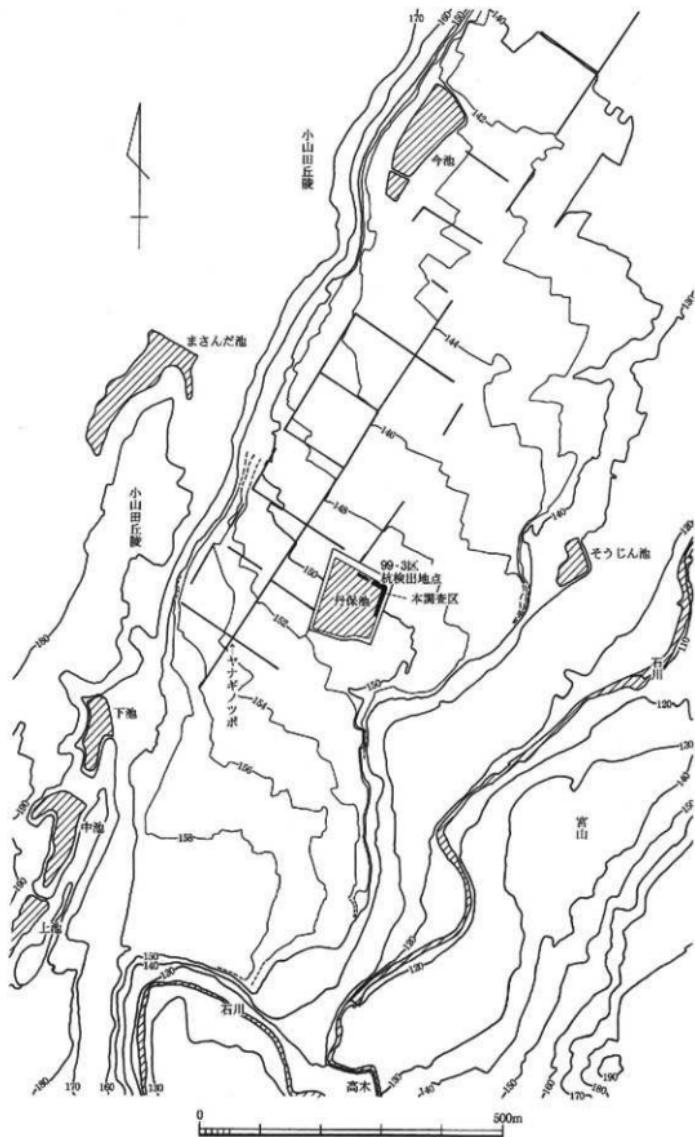
丹保池北側に位置するTKO94-1からは、飛鳥から奈良時代の掘立柱建物が8棟検出されている。SB1は、検出した状況から3×2以上、柱間2m以上の建物であると考えられている。SB6の規模は3×2であり、柱間は2m以上である。SB7もSB6と同様3×2の建物で、柱間も2m前後を測った。SB8の全容は不明であるが、柱間が2m強であり、SB6・7と同様の規模と考えられる。SB9・SB10の規模は2×2、柱間1m強でSB1・SB6・SB7・SB8とは様相が異なる。

今次調査は細長い調査域であり建物の復元は困難な状況であるが、これら既往の調査による掘立柱建物の検出状況から、今次調査において検出された掘形をもつ柱穴の構成する建物も同様の傾向があると考えられる。

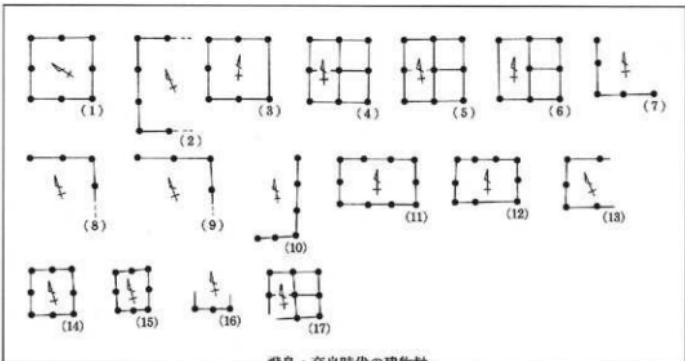
飛鳥・奈良時代の集落遺跡が決して多くはない河内長野市域において、今次調査区から出土した墨書き土器の意義は大きい。しかし筆者の力量不足により、それを生かすことが出来なかった。識者諸賢の御批判を仰ぎ、今後の課題としたい。



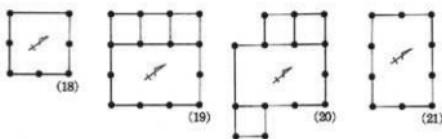
第18図 抗列 平面・立体図



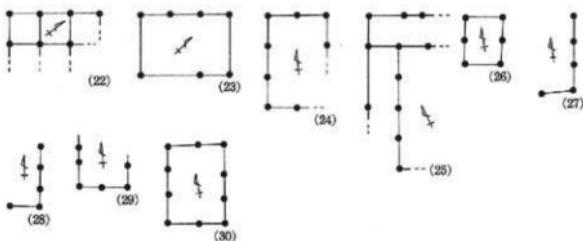
第19図 高向周辺の条里プラン (N-35° - E 又は N-55° - W)』



飛鳥・奈良時代の建物軸

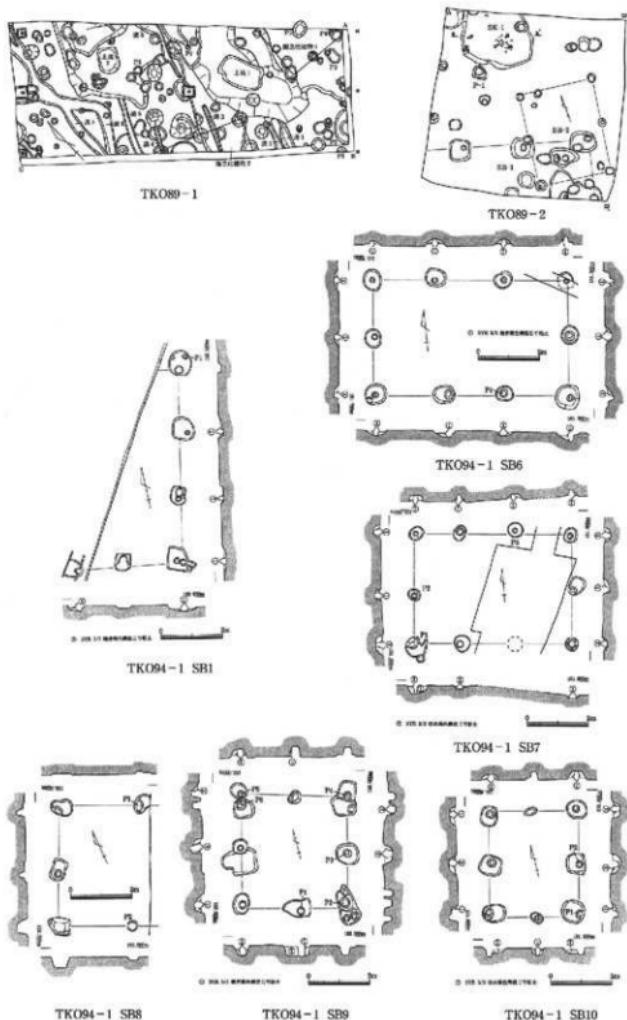


11世紀前後の建物軸



中近世の建物軸

第20図 既往調査で検出された建物軸



第21図 既往調査で検出された建物跡

(謝辞)

末筆ではあるが、調査・整理中において中村浩氏（大谷女子大学教授）・藤澤典彦氏（大谷女子大学助教授）・木立雅朗氏（立命館大学助教授）の諸先生方には御指導・御助言を賜った。また、調査・整理中の資料収集・資料解釈において、陣内高志（農中市教育委員会）・岡本洋・田福涼（以上立命館大学大学院生）・竹本晃（大阪市立大学大学院生）・松山功（立命館大学学生）の各氏より御教示・御助言を頂いた。箕造加奈子（京都橘女子大学学生）には挿図作成・校正に至るまで数々の御協力を頂いた。特に高木久美子（立命館大学学生）には調査から執筆・編集の段階まで雑用その他多くのことで御尽力を頂き、多大な御迷惑をおかけした。各氏に対し、記して深謝の意を表したい。

調査・整理には下記の方々の御協力を得た。記して深謝の意を表したい。

箕造加奈子（京都橘女子大学学生）・澤崎梨奈・奥裕香子（東北芸術工科大学学生）・金行美智子・中村智佳・西川綾子・西川由紀・柳光早矢香（以上大谷女子大学学生）

(順不同)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	たこういせきはっくつちょうさがいよう						
書名	高向遺跡発掘調査概要Ⅱ						
副書名	溜池等改修事業丹保池改修工事に伴う埋蔵文化財調査						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	尾谷雅彦 藤田徹也						
編集機関	大阪府教育委員会						
所在地	〒540-8571大阪府大阪市中央区大手前2丁目TEL 06-6941-0351						
発行年月日	2001年3月						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査面積 (m)	調査原因
		市町村	遺跡					
たこういせき 高向遺跡	おおさか ふ 大阪府 かわうちの し 河内長野市 こうの 高向	27216	23	34° 26' 06"	135° 33' 08"	00.12.08 ~ 01.03.23	252	溜池改修

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高向遺跡	集落	奈良時代	ピット・土坑・杭列	土師器・須恵器・墨書土器	

図 版

図版一 航空写真
調査区全景



図版二一 航空写真
調査区南側



図版三 航空写真 調査区中央



図版四 航空写真
調査区北側





調查區南壁斷面



調查區西壁斷面



SK 5 土器出土状况



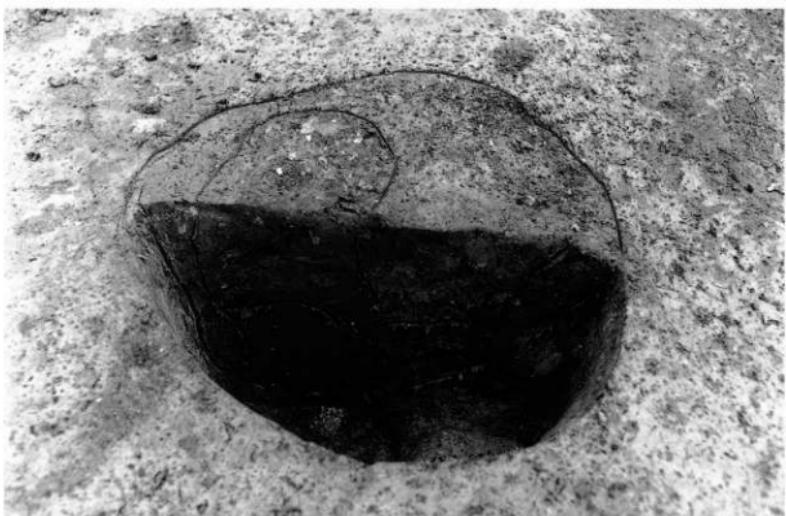
SK 8 土器出土状况



SP 9断面（西から）



SP 19断面（西から）



S P 15断面（西から）



S P 29・30断面（西から）



SP 16断面（西から）



SK 1断面（西から）



S A 1 遠景（南から）



墨青土器

